

帰してはいけない外来患者

前野哲博, 松村真司 編

＜書評者＞ 大橋博樹 (多摩ファミリークリニック院長)

私が初期研修を行った武蔵野赤十字病院の救急外来には1冊のノートが置かれていた。そこには研修医たちがおのおのの救急外来当直で経験したちょっとした診療のコツや、変わった風貌の患者さんのこと、そして信頼できる仲間だからいえる失敗談などが赤裸々に書いてあった。もちろん、そのころから「〇〇マニュアル」と呼ばれる救急外来で用いるツールはあったが、正直どれも「理想的な検査や治療」が書かれているものが多く、いつのまにか白衣のポケットの中で擦り切れていたのを覚えている。やはり、現場で最も使えるのは同じ仲間・同じ悩みを持った人たちが書いている診療のポイント集であり、つまずきやすい場所もあえて記載してあるのが、妙に親近感がわくのである。

本書を初めて手にしたとき、あのときのノートの印象がよみがえった。

編集は、プライマリ・ケア教育の第1人者前野哲博先生、そして数多くの著書があり若手家庭医からの人望も集める、開業医の松村真司先生である。執筆陣をみると、現場の第一線で活躍している若手指導医が中心となっている。これは、今までのマニュアルとはちょっと違うようだ。

まず第1章を開いてみると、外来で使える general rule について総論的に述べている。とかく臨床決断というと、尤度比だったり陽

性的中率だったり、EBM 的な発想の記述が多いが、本書では決断を規定する4つの因子を、「急ぐか」「ヤバイか」「ありえるか」「予後を変えうるか」で規定している。そうそう、救急外来で迷ったときに、私もこうやって考えていたなあ、となんだか読んでいてワクワクする内容だ。そして、本書の素晴らしいのは今までなんとなく指導医も行ってきた臨床決断のアプローチをきちと言語化していることである。第1章は若手医師だけでなく、指導医クラスの医師にもぜひ一読をお勧めしたい。

第2章は症候別 general rule と題して、全身倦怠感や咽頭痛、めまいなど、よくある症候を2ページの見開きで解説している。今までのこの分野の書物では、「これは危険」「これも危険」といった、見逃してはいけないポイントを次々と紹介して、かえってどこまで検査をすればよいのだろうかという混乱を招いたものも多かった。『帰してはいけない外来患者』という題名からすると、この本も……と初めは考えたが、そこは違っていた。この本には帰してはいけない患者の見分け方とともに、「これは安心」という項目があるのだ。例えば「呼吸不全がなく緩徐に発症した全身性浮腫は、外来精査が可能」とある。ともすると異論を唱える人もいるかもしれないが、これは若手医師が、まず経験するための general rule で

ある。この一言が外来診療でまさに前に進める羅針盤となるのだ。そして、最後に general rule として、忘れてはならないポイントが簡潔に記してある。「頸部に圧痛のある咽頭痛は要注意！」確かに、私も咽頭間隙膿瘍を見逃したことが……。

第3章ではケースブックと題して、研修医と指導医の外来でのディスカッションを通して診断に行き着く過程を記している。私も以前に編者である前野先生のカンファレンスに参加したことがあるが、自由な雰囲気の中で間違いを恐れずなんでも話せる環境での指導に大変感銘した。本書でもそのエッセンスがみごとに表現されている。まえがきにもあるが、日本の医学教育における外来教育の質と量は明らかに不十分である。その原因には、みずからが外来教育を受けたことがない指導医が外来指導を行うため、なにを指導してよいかわからないという側面もある。ぜひとも第3章は悩める指導医にも読んでもらいたい。

本書は、若手医師から現場の指導医まで、それぞれの立場で活用できる貴重な1冊である。擦り切れるまで読んでもらうことで、外来診療の向上、そして外来教育の向上につながることは間違いのない。まさに「買わなければいけない外来教科書」である。

●A5 頁228 2012年
定価3,990円
(本体3,800円+税5%)
[ISBN978-4-260-01494-6]
医学書院刊